

11月15日、JR東海のJR採用者で初めてJR東海労へ加入し、中央本部の交渉担当役員や地方本部の書記長を務め、今や幹部の1人となっていたM氏が同労組を脱退することが明らかになった。JR東海労にとってもこれは衝撃であったようで、M氏を呼び捨てで強く批判する広報紙を連続して発行している。

本紙 No. 1049 でも伝えたが、M氏は本年6月のJR東海労第41回定期大会において、JR総連と対立を深めていくJR東海労のスタンスを、「共済など組合員個々の利益を守ることに繋がない」「(JR総連と決別した場合)4人のJR採用者をどう支えていくのか」との内容で痛烈に批判した。一方でM氏は、高度経済成長期にもてはやされた「金の卵」の如く、JR東海労では長く、数少ないJR採用者として大事にされてきた。従って、自分を可愛がってくれていた先輩たちを捨てて脱退することもないだろうとも見られていた。その人物が脱退したことは、それだけJR東海労が「個々の組合員を顧みない」組織であることを示していると言えよう。

「組合員不在」の運動により落日のJR東海労と JR東海における足掛かりを死守するJR総連

JR総連は9月12日に第41回臨時大会を開催し、JR東海労の「除名」を満場一致で決定した。JR東海労はこれを不服とし、「再審査申立」を行い、再度「統制委員会」が立ち上がった(10/30第47回臨時中央委員会)。JR東海労ニュースNo. 2868によれば、JR総連は12月12日に再度臨時大会を開催し、JR東海労の再審査申立てに対し、再びの「除名」を決定する見込みと指摘する。さらに、その前段で前述のM氏を含むJR東海労からの脱退者が新たな労組を作り、同臨時大会でJR総連への新規加盟を目論んでいるともJR東海労は指摘している。

相次ぐ組織“脱落者”は既に20名規模に…JR総連との連携を模索か

M氏が脱退を表明して以降、JR東海労からは脱退者が相次ぎ、JR東海労の広報紙からは既に20名規模に達していることが読み取れる。同労組は2023年度末で120名程度の組織のため、2割近くが脱退する計算であり、少なくない割合だ。

JR東海労はこの脱退者らを「組織脱落者」などと名指しで批判する一方、「JR東海労を結成して33年間、会社権力と闘ってきたその情熱はどこにいったのですか。仲間と手を携えて励まし頑張ってきた思いはどこにいったのですか」などと脱退を踏みとどまるよう呼び掛けてもいる。

しかし、脱退の流れが止まっている訳でもなさそうだ。「33年間、会社権力と闘ってきた」などと威勢は良いものの、会社の揚げ足を取るが如く批判を繰り返すだけで組合員重視とは程遠い生産性なき組織に、敢えて留まる程の魅力もないのだろう。

「JR総連 vs JR東海労」問題の本質は、JR内の革マル派活動家の対立

ここで忘れてはならないのは、本紙 No. 1047 等で指摘したように、今回の対立の背景として、JR内革マル派活動家間における対立の存在が強く推認される、ということだ。JR東海労が指摘する新労組の結成に対し、JR総連の側にはJR東海における拠点を失わないよう使いやすい役員を残しておきたいという組織の論理が見え隠れする。一方、JR東海労もまた「東海の地に労働運動の炎を燃やし続けよう」とのスローガンでJRサービック労働組合(JS労)との連携を図りながら新たな「組織展望を切り拓く」と組織強化・拡大に強い意欲を見せている。両者は対立関係にあり、志向する方向性も異なるが、組合員個人の利益追求よりもそれぞれの組織の温存・建設を優先する姿勢自体は共通している。こうした姿こそが革マル派の影響を受けた組織の特徴であり、本質なのだ。引き続きその動向に注目していく。